

大谷口村 現浦和市大谷口・原山一丁目・同三―四丁目・太田窪三丁目・太田窪

中尾村の南に位置し、東は柳崎村（現川口市）など。大宮台地浦和支台の先端とそれを取巻く溺れ谷からなる。田園簿では田七七〇石余・畑七九〇石余、ほかに玉林院領一五石・吉祥寺領五石・氷川大明神領一〇石余が記されており、中尾村も当村に含まれていたことが知られる。

元禄郷帳では高七七九石余に減少しており、この間に中尾村・広ヶ谷戸村・道祖土村・柳崎村・井沼方村などが分離していったと思われる（風土記稿）。江戸時代を通じて幕府領であったと思われる（田園簿・国立史料館本元禄郷帳など）。検地は元和九年（一六二二）と元禄三年（一六九〇）の実施が伝えられ、新田検地が享保一七年（一七三二）と明和五年（一七六八）に行われたという。木崎領に属し、化政期の家数一三六（風土記稿）。文政四年（一八二二）の村明細帳（遠山家文書）によると、田四二石余・四町三反余、畑七三八石余・一二二町七反余となっている。産物として里芋・生姜・束芋・薯蕷・薩摩芋があり、江戸表へ出荷している。作物として田方では晩稻・沼田・仙屋・黒髭など、畑方では大麦・小麦・粟・稗・

大豆・小豆などを作っている。農間に男は縄・苳など、女は木綿糸機などを手前遣いに作り、農間の酒商五、塩油醤油付木売一、木綿切元結油草紙売一、大工一、屋根葺一がいた。中山道浦和宿の定助郷を勤めた。また臨時の通行の際には日光御成道鳩ヶ谷宿へ加助郷に出役し、その際には浦和宿の助郷は休役となった。

氷川神社があり、中尾・広ヶ谷戸・道祖土・柳崎の四村の鎮守。別当は天台宗安楽寺（風土記稿）。野口家には同社宛の徳川家光以来の朱印状および安楽寺文書が伝わる。浦和支台の南端に明花向遺跡がある。昭和五六年（一九八一）と同五七年に発掘調査が行われ、後期旧石器時代の遺物と縄文時代早期と弥生時代中期・後期、中世・近世の遺構・遺物が発見された。弥生時代中期の宮ノ台式土器を伴う竪穴住居跡六と方形周溝墓は同遺跡の西部にある。また弥生時代後期（弥生町式期）の竪穴住居跡は東部に集中している。弥生時代中期の竪穴住居跡からは壺・甕形土器が多く出土し、ほかに磨製石斧がみられた。土器のなかに信州系や北関東系の土器が混在している。方形周溝墓からも弥生時代中期後半の宮ノ台式土器が出土しており、県南部地域では最も古いものである。ほかに縄文時代中期末葉の集落跡が検出された坊ノ在家遺跡、縄文時代後期の明花遺跡がある。